

新刊紹介

生活主体の形成と家庭科教育

荒井紀子 著

ドメス出版, A5判, 365頁, 5,250円

2008年2月発行

本書は、「生活主体の形成」をキー概念として、家庭科教育の可能性と課題を明らかにしており、家庭科教育に携わる研究者や学校教師にとって、大変興味深く、多くの示唆に富んでいる。

全体構成は、第Ⅰ部「理論編」、第Ⅱ部「調査編」、第Ⅲ部「カリキュラム・授業編」の3部構成である。

第Ⅰ部「理論編」では、家政学における生活主体の概念とその位置づけや、家庭科教育における生活主体形成の教育視点などについて検討している。その前提として、「生活者」「市民」「生活主体」の言葉の意味や相互関係について社会学や教育学の近年の論説を基に検討している。その中にイギリスの市民性教育について述べられている部分があり、イギリスの市民権の解釈は、権利の獲得が重視される「自由主義的市民権」と義務の獲得が重視される「共和主義的市民権」の二つがあることを指摘し、「わが国において、市民性教育について論じたり、実際に学習を実践する場合は、この市民性のもつ両面性のどの文脈に位置づくのかについて、より意識的かつ、クリティカルな把握が必要ではないかと考える。」(p. 17)と述べている点など、日本の家庭科教育にとって見逃せない示唆もある。

また、スウェーデンの教育に焦点を当て、生活主体の形成に積極的に取り組んできた学校教育の歴史を辿り、カリキュラムの変遷や教科書の内容

について分析を行っている。

第Ⅱ部「調査編」では、生徒と教師を対象とした意識・実態調査の分析を基に、生活主体の形成と家庭科教育との関わりを実証的に検討している。

まず、高校生については、男女必修の家庭科が開始された1994年時点でのジェンダー観と生活主権者意識について、家庭科履修者と未履修者の違いを中心に分析している。加えて、ほぼ同時期に同様の調査項目でスウェーデンの生徒を対象に実施した調査結果を基に、両国の生徒の意識の相違とその背景について分析している。さらに、日本については、男女共学必修開始の10年目にあたる2003年にも調査しており、生徒の意識と実態の経年変化についても詳細に検討がなされている。

第Ⅲ部「カリキュラム・授業編」では、家庭科の新しいカリキュラムの理論的枠組みを構想し、その理論に基づいた授業開発と実践・評価を行っている。

「住環境」、「高齢者福祉」、「ジェンダー」をテーマとした高校家庭科の3つの授業モデルが提示され、その授業の実践過程と効果についての評価、分析が行われている。著者が北陸地区において、共同研究者と教員と共に議論を重ねた大きな成果が示されている。

そして、終章では、生活主体形成に果たす家庭科教育の役割と可能性、および今後の課題について考察している。特に、社会福祉と男女平等で知られるスウェーデンに関して、著者が長年にわたりスウェーデンの研究者と共同で行ってきた比較研究に基づく知見は、他に例がなく、極めて貴重である。

(井元りえ)

装いのアーカイブズ

—ヨーロッパの宮廷・騎士・
農漁民・祝祭・伝統衣装

平井紀子 著

発行：日外アソシエーツ，発売元：紀伊国屋書店

2008年5月発行，3,200円＋税

本書は、服飾関係の図書館に勤務した著者が、

多くの服飾関係図書の文献解題をまとめたものに、図像解説を加えて解説を行ったものである。

その内容は、王侯貴族の衣裳であった歴史服と、民間で着用されていた民族服とを取り上げ、西洋服飾の一端を明らかにするものである。

第1章 君主および皇帝・皇后の服装

マリー・アントワネット，ナポレオンの宮廷服

オスマン・トルコの正妻，タシケントの君主の

外衣